

成果報告書

記入日 2024 年 3 月 28 日

フリガナ (パク ウォンソン) 氏名 朴 苑善	渡航先国名・地域 タイ国・チェンマイ	所属機関 大阪大学大学院 言語文化研究科
研究テーマ： 都市の中の社会空間：チェンマイ都市を生きるタイヤイの若者に着目して		
研究期間：2022 年 8 月～2023 年 7 月 (1 年 0 ヶ月)		
研究成果 (概要) 本研究では、タイ国内の都市チェンマイに暮らすタイヤイの若者がチェンマイという都市をどのように生きるかについて、主に文献調査とフィールド調査をもとに考察した。現地では、調査以外にも現地の学会で研究発表を行い、投稿論文の執筆にも取り組んだ。		
研究成果 (詳細) 【研究の詳細】 本研究の目的は、タイ国内の都市チェンマイに暮らすタイヤイの若者に着目し、タイヤイの若者が都市の中で形成する社会空間から、彼らがチェンマイという都市をどのように生きるかについて明らかにすることである。主なフィールドは、タイ国北部の都市チェンマイである。チェンマイは、タイ国では首都バンコクに続く第二の都市、タイ国北部の中核都市としてタイの経済・産業を担っている。また、近隣諸国・地域を結ぶ結節点としての役割も大きく、国境付近の農村部から移動してきた様々な民族が交わる地理的空間である。そしてタイヤイは、タイ国と隣接するミャンマー・シャン州から現在のタイ国北部にあたる地域へと移住したタイ系民族 (Tai) であり、本研究の対象となるグループである。タイ国北部の地域ではミャンマーから移動した民族のうち、最大のグループを形成している。 本研究は、様々な世代のタイヤイの中でも特に「若者」に着目しており、彼らがチェンマイという都市の中で形成する社会空間として、「アソシエーション」の活動を取り上げ、場所との密接な関係の中でタイヤイの若者はチェンマイという都市をどのように生きるかについて考察した。 【研究方法】 研究方法として、文献調査とフィールド調査を用いた。調査者は2022年8月にタイ国へ渡航し、当初、調査フィールドとして設定したタイ国の都市チェンマイとバンコクの二つの地域において、若者タイヤイの都市生活や空間に関するデータを収集した (博士論文では、チェンマイのみを分析と考察の対象とする)。まずは、タイヤイの若者が多く集う、チェンマイ市内にある大学内のアソシエーション「Tai Association MCU Chiang Mai」にて参与観察を行った。同アソシエーションは、タイヤイの若者を対象に、タイ語や英語などの授業を開講している。調査者は、そこでタイヤイ (シャン) 語を勉強しながらインフォーマントと交友関係を築き、調査を進めた。		

【研究の成果-1, 文献調査】

人類学、地理学、社会学など、複数の研究分野において議論されている「民族・移民」や「都市」をめぐる研究状況をレビューし、自らの研究テーマに適用できる概念や分析方法、理論的枠組みを模索した。また、先行研究レビューの記述に必要な学術文献や研究データを、タイ国内のデータベースを用いて収集することができた。また、都市空間に関する文献をレビューし、アフリカ地域や南太平洋地域の都市人類学研究から、本研究の基礎となる理論や概念を模索した。

【研究の成果-2, フィールド調査】

2022年8月よりおよそ1年間、当初の調査フィールドとして設定していたタイ国の都市チェンマイとバンコクにてフィールド調査を実施した。まずは、先述したように、タイヤイの若者が多く集う「Tai Association MCU Chiang Mai」にて参与観察を行った。そして、同アソシエーションに関わるタイヤイの若者を対象に、個別の聞き取り調査を行った。調査から、サークルに学びに来る若者の属性が様々であることが明らかになった。タイ国内で生まれ育った者、タイ国内での就労を目的に来タイした者、タイ国内の高等教育機関への留学・進学を目的に来タイした僧侶大学生及び一般の大学生などである。現在の属性だけでなく、同じタイヤイの若者であっても、生まれ育った地域、家庭内環境、教育経験の差などに違いが見られた。そのような違いは、さらに、国籍の有無、身分証明書類の種類、使用言語、政治に対する考え方などの違いとして表れていることが分かった。

また、タイヤイの若者がチェンマイという都市の中で形成する社会空間として、アソシエーションが運営する、日常的な活動として営まれるのサークル活動以外に、非日常的な活動として開催されるイベント行事にも着目した。アソシエーションの活動によって形成される社会空間とイベント行事によって形成される社会空間は、どちらにおいても「タイヤイであること」が共通項となっており、これまでの研究では、移民としてのタイヤイがタイ社会の中で集まることによって自らのエスニシティを再認識していると述べられてきた。しかし、調査者は、本調査を通して、タイヤイの若者にとってこのような空間は彼らのエスニシティを認識する場としてあるだけでなく、同じタイヤイの若者同士の「差異」を認識する場として機能していることを明らかにした。これは、アソシエーション内の人たちと関わる中で、同じタイヤイの若者同士の中に見られる違いを認識するようになるためである。また、彼らの生活圏がチェンマイ県の農村部や国境付近などではなく都市であることも、権利の獲得やモノ・コトの消費などの面で彼らの生活に大きく影響している。本研究で明らかにした若者の社会空間は、都市の中の社会空間であり、タイヤイの若者がアソシエーションを形成したり、イベントに参加したりすることを可能にしているのは、チェンマイという都市がタイヤイの若者にとって、就労の場であると同時に、同じ目的（例えば、言語学習など）をもとに集まったり、消費活動をおこなったり、余暇活動を楽しんだりする都市的な要素を持つからだと考察している。現在、以上のような内容をもとに博士論文を執筆中である。

【研究の成果-4, 研究発表・論文投稿】

2023年7月にタイ国・バンコク、シリントーン人類学センターで開催された、第66回研究大会にて、「宗教空間における若者タイヤイ移民の社会空間」をテーマにタイ語で口頭発表を行った。チェンマイ大学の先生と博士後期課程に在籍する研究者らと共に行ったパネル発表である。また、それらの内容についてタイ語でまとめたショートペーパーが、シリントーン人類学センターが刊行する論文集に掲載された。

帰国後は、2023年11月に韓国・釜山、釜山外国語大学と韓国アセアン研究所が共催した国際学会で、「The significance of access to higher education for Shan migrants: A Case Study of the Young Generation of Shan in Chiang Mai, Thailand」をテーマに英語で口頭発表を行った。現在、上記のテーマで英語論文を執筆中であり、2024年度内に釜山外国語大学の学術誌に投稿予定である。また、調査者が所属する大阪大学で2023年12月に開催された第190回大阪大学地域研究フォーラム(OUFAS)では、「タイ国内における若者タイヤイ移民の社会空間の形成」という内容で現地調査後初の研究報告を行い、教員や博士前期・後期課程の研究者らから助言を得ることができた。

留学中の生活・研究でのトピックス

調査者は、調査を行う間、インフォーマントであるタイヤイの若者のチェンマイでの生活を知るために、可能な限り多くの時間を彼らと過ごすことに努めた。毎週日曜日には、タイヤイの若者が多く集う「Tai Association MCU Chiang Mai」にて参与観察を行い、調査者は学生としてタイヤイ語のクラスに参加した。同世代だということもあり、彼らとはすぐに親しくなることができた。交友関係が築けてくると、調査者と彼らの間で様々なトピックの会話がなされるようになった。海外の文化に関心がある人が多く、彼らとそれぞれの国や地域の文化の違いについて楽しく話し合ったり、時には政治や社会情勢などについて議論したりもした。特に、当時、話題に上がっていたミャンマークーデター以降のミャンマー情勢について、タイヤイの若者目線で話を聞くことができたのは調査者にとって非常に有意義なものとなった。他にも、彼らと一緒にタイヤイの友人の結婚式に参加したり、食事に出かけたり、サッカーをしに行ったり、お祭りに参加したり、韓国ドラマを見たりして、彼らの日常に溶け込んだ。しかし、どれほど彼らの日常に溶け込んだとしても、調査者は調査の現場では未だ「調査をする人」であり、調査を行う上で、調査者の言動がインフォーマントにとってマイナスに響くことが無いよう最大限の注意を払った。調査者は、フィールドワークを通じて、自身の調査者としての立場を「調整」しながら調査に挑むことの重要性を学んだ。

調査期間中に、所属している大阪大学での指導教員と指導教員が大学院生だった頃のフィールドを訪問した。先生が調査を行っていた頃から20年が過ぎた今、先生と当時のインフォーマントの現在における関係を垣間見ることができた。そこには、長い年月をかけて築かれた信頼関係があるように感じられた。調査者は、人間関係は変わり続けるものであると考えている。指導教員の姿を見ながら、これからもインフォーマントとの関係を「調整」しながら良好な人間関係を築いていきたいと思った。



今後の社会貢献

タイ国をフィールドにした地域研究として、本研究より明らかになったチェンマイという都市社会とタイヤイの若者の関係をもとに、日本をはじめとし、世界各地での移民・外国人受け入れ問題や政策について考える際の指標を提示したい。柔軟な他者理解は、今後の日本社会とりわけ都市社会においては、ますます重要となると考えられるため、本研究の成果の公表を以て多様性に寛容な社会づくりへの知的貢献としたい。